

教育プログラムの2回目の修了式を終えて

2015年3月、第2回目となる今回の修了式では23名が修了証を手に入れました。今回の修了証は、秋のスタディツアーおよび森里海シンポジウムでもご協力いただいた(株)コクヨ工業滋賀のReEDENシリーズ製品、琵琶湖・淀川水系のヨシのパルプを30%配合したヨシ紙で作られています。修了証からも、森里海のつながり、人と自然のつながりを感じてもらえれば、と思います。

2014年度は、必修科目の森里海国際貢献学（昨年度までは統合管理国際貢献学演習、ユニットの教員が主催するセミナー形式の講義）をさらに徹底しました。実習やスタディツアーも含めて、履修生と顔を合わせる機会も多くなりました。プログラム修了と同時に修士課程・博士課程を修了して大学を巣立っていく人もいます。インターンシップや国際学会発表での経験、研究のこと、いろいろな話をしたことを思い返すと、気軽に会えなくなるのはさみしい気もしますが、それぞれの新しい場所での活躍を心から願っています。

Event calendar 2014 October – 2015 March

10月	1	後期授業開始	
	12	森里海連環学公開講座：滋賀銀行の環境金融の取り組み	Event report 1
11月	14	森里海連環学スタディツアー-2014 秋 in 愛荘町	Event report 2
	17	森里海連環学公開講座：たねやグループと森里海	Event report 1
12月	14	京都大学・日本財団 森里海シンポジウム：「人と自然のつながり」を育てる地域の力 — 淡海発・企業の挑戦 —	Event report 3
1月	20	2015 年度国際学会発表補助金(第1回)募集開始	
2月		後期授業終了	
	2	森里海連環学教育ユニットと(株)たねやとの連携に関する覚書の調印式・記者説明会	Event report 4
	19	Pre-meeting for Joint Research Project on CoHHO in Hue, Vietnam	Event report 5
3月	22	森里海連環学スタディツアー-2015 春 in 近江八幡・同窓会主催懇親会	Event report 6
	23	第2回修了式・2015 年度京都大学-日本財団森里海連環学フェロー授与式	Event report 7

CoHHO INTERNSHIP 2014 MAP OF ALL THE WORLD



宮地 茉莉 BRAC University
ノアカリのプロジェクトで建てられた住居と
家族、インタビューしている様子2枚
バングラデシュ・ダッカ
(2014.8.29-9.29)



阿津 良典
Kaamasen kievari
観光・ボランティア局
フィンランド・カーマゼン
(2014.12.12-2015.1.11)



山本 裕実子
University of Gloucestershire,
Countryside and Community
Research Institute (CCRI)
インタビュー等でお世話になった
市民団体代表の方とテムズ川沿
いのフットパスで
イギリス・グロスター
(2014.9.17-11.12)

尾上 昌也
University of
Western Brittany
European Institute of
Marine
Studies(IUEM)
フランス・プレスト
(2014.9.14-12.13)



山田 駿介
Technology University of Berlin
After the final meeting
ドイツ・ベルリン
(2014.12.2-2015.2.28)

管野 未歩
ナミビア共和国農業・水・森林省、オナカシノ村
ナミビア北中部の村に滞在し、村人に農業に関
する聞き取り調査を行っている様子
ナミビア・ウィンドホーク
(2014.12.2-2015.2.2)

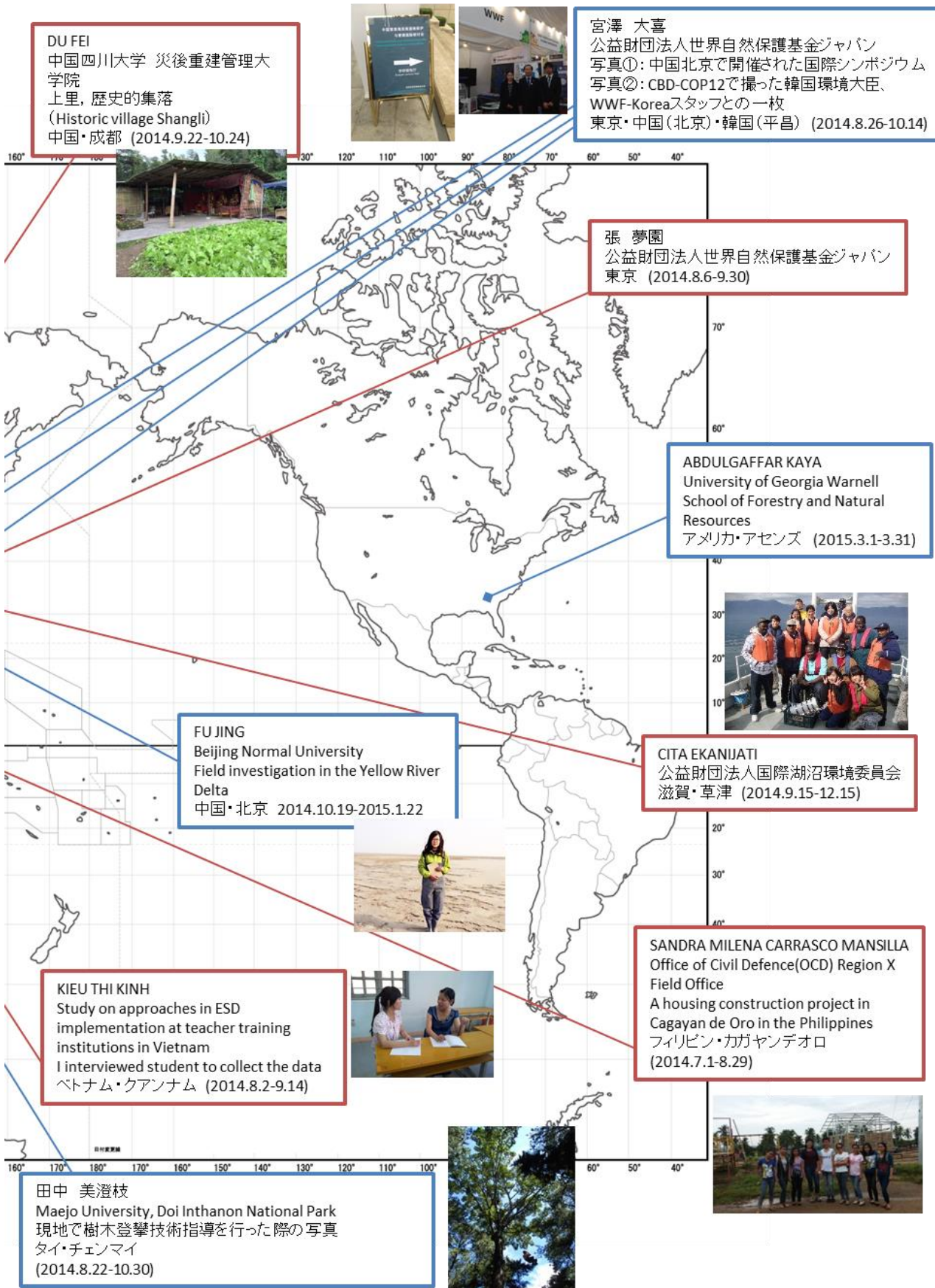


MRITTIKA BASU
District administration, Purulia
The photo is taken after conducting
FGD with local communities in a
mountainous village in Purulia
インド・西ベンガル
(2014.11.28-2015.2.7)



平井 聡
NPO法人アプカス
スリランカ・コロombo
(2014.9.1-12.5)

17名の履修生が森里海連環学教育プログラムのオリジナル科目「インターンシップ」を履修し、さまざまな知識・経験を得てきました。



第12・13回の森里海連環学公開講座は、2014年12月14日に開催される森里海シンポジウム「人と自然のつながり」を育てる地域の力ー淡海（おうみ）発・企業の挑戦ーの事前勉強会として行われました。

11月12日に開催された第12回の森里海連環学公開講座では、スピーカーに滋賀銀行総合企画部CSR室の室長・辰巳勝則氏を迎え、「滋賀銀行の環境金融の取り組み」に関する講演をいただきました。公開講座の当日は、京都大学の学生だけではなく、滋賀銀行の環境融資に興味を持っている他大学からも多くの学生が参加しました。

辰巳勝則氏からはまず、滋賀銀行のCSRについての説明がありました。全国の地方銀行の中でもいち早くCSRに取り組んできた滋賀銀行では、CSRは1984年に福祉の基金からスタートし、特に地域の力をいかに育てていくか、人と自然のつながりをいかに作っていくかを担うことを自ら目標としてきました。

滋賀銀行が積極的に環境保全に取り組む理由として、滋賀県の地勢が地球の縮図と類似すること、近江商人に継承されてきた三方良しー自分とお客様のみならず環境にも良い営み方ー、滋賀銀行を地域バンクとして環境に特化していくと宣言した経営者のリーダーシップ、の3つが挙げられていました。金融機関は直接ものづくりをするわけではないが、ものづくりのための資金を、社会が必要とするところに回していく役割を持っています。環境保全を促進するため、滋賀銀行は、独自に作成した環境格付や生物多様性の格付の基準を用いた融資先の審査や、顧客向けの環境コミュニケーションー例えばビジネスフォーラム『サタデー起業塾』、エコビジネスマッチングフェア、顧客のニーズを行内でネットワーク化し顧客同士を結びつけたりすることなどを行っています。地域密着型金融なりに、お金の流れで地球環境を守ることを目指しています。



スピーカーの辰巳勝則氏

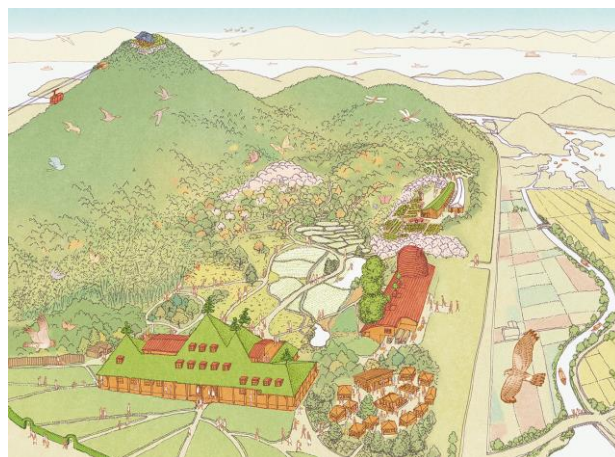


学生からの質問に真摯に回答される様子

そして、11月17日には第13回の森里海連環学公開講座が開催されました。スピーカーは、たねや農藝 北之庄菜園・園長の讃岐和幸氏です。講演のテーマは「たねやグループと森里海」、内容はたねや農藝 北之庄菜園の成立と園長としての日頃の活動に関するものです。

たねやグループは和菓子・洋菓子の製造・販売を行っており、近年では、食べる直前にお客様自身がサクサクな最中の皮に餡を挟むような斬新な和菓子とクラブハリエのバームクーヘンで消費者の心を掴んでいます。たねやは、小麦、お米、小豆など原材料を取得・仕入れたうえの商売であり、たねやの商売は自然と共に生きていくもの、とたねやグループの経営者は考えているとのことでした。

このようなコンセプトに沿って作られたのが、人々が集まる森のお菓子屋さん、「ラ・コリーナ 近江八幡（以下、ラ・コリーナ）」なのです。ラ・コリーナが目指している姿は、八幡山から連なる丘に緑深い森を夢み自ら木を植え、ホタル舞う小川を作り、生き物たちが元気に生きづく田畑を耕すことです。そこで、ラ・コリーナと共に産声を上げた「たねや農藝 北之庄菜園」には、オーガニックで野菜を作り、それをラ・コリーナで販売し、周辺地域にオーガニックの輪を広げ、やがては滋賀県中に広めていく想いが託されています。



ラ・コリーナの構想図（発表資料より引用）

現在、ラ・コリーナの敷地内に畑がつくられ、たねやの従業員が自ら農作業に挑んでいます。また、敷地内の植林のための「どんぐりプロジェクト」は、定期的に社内で実施されています。八幡山から拾ってきたどんぐりの種を菜園で育て、大きくなった苗を敷地内に植えていきます。さらに、2013年から、近隣する八幡山の麓に放置された竹林の整備を始め、廃材の循環利用を進めてきました。

たねや社長が提唱する「自然を愛し、自然に学ぶ」コンセプトはたねやグループ全体で実現しています。

（黄 琬恵）



スピーカーの讃岐和幸氏



京都大学森里海連環学分校について説明

2014年11月14日（金）に森里海連環学スタディツアー 2014 秋 in 愛荘町を実施し、琵琶湖のヨシの活用に取り組むコクヨ工業滋賀の工場を見学しました。

琵琶湖は周囲をヨシ原に囲まれており、独特の景観が作られています。そのヨシ原は、生き物に生息場所を提供したり水の浄化機能を有していたりと、琵琶湖の環境とも深くかかわっています。かつて、ヨシはすだれや屋根の材料として利用されていました。そして、定期的に刈り取りが行われることでヨシの生育が促され、健全なヨシ原が保たれていました。しかし、外国産の安価なすだれが輸入されるようになったり私たちの住宅事情が変わっていったりするにつれ、ヨシの利用は低下し、ヨシ原の放置・荒廃が進みました。

こうした中、琵琶湖のほとりて操業するコクヨ工業滋賀は“地元的环境を守りたい”という思いからヨシ原を守る活動を2007年に始めました。社内の有志で始めたヨシ刈りは地元企業や取引先などにも広がり、現在では100団体が参加する「ヨシでびわ湖を守るネットワーク」に発展しました。また、琵琶湖のヨシを原料に用いた紙製品「ReEDEN」シリーズの生産・販売も積極的に展開しています。

小春日和となったスタディツアー当日、まずは工場の最寄りの道の駅「あいとうマーガレットステーション」を訪れました。旧愛東町は、菜の花からなたね油を搾り、そのなたね油を食用として用いた後、石けんやバイディーゼル燃料にリサイクルするという地域資源循環システム「菜の花プロジェクト」を全国に先駆けて実施した町です。施設を見学したり、昼食を食べたり、直売所で地元野菜を購入したりして、思い思いの時間を過ごしました。

午後、コクヨ工業滋賀の工場を訪れました。最初に、同社の事業概要や工場環境保全活動、琵琶湖のヨシ原の保全活動などについてスライドを用いて説明していただき、続いて工場内部を案内していただきました。自分たちが日頃使っているノートの生産現場を見るのは少し興奮しました！その後、「ReEDEN」シリーズの開発・デザインを担当されている女子社員の方々からもお話を聞きました。就職活動を控えた学生たちにとっては企業の仕事を理解する良い機会となったようで、質疑応答も活発でした。

（長谷川路子）



前田賢一代表取締役社長による説明



質問は尽きません

～スタディツアー2014 in 愛荘町 学生レポート～

ヨシからできた紙製品はどうしてもコストが高いため、高い値段で買ってもらわなければならない。だから、高い値段を付けても買ってもらえるように付加価値をつけなければならない。そこで、コクヨさんはかわいらしいノートを作ったりとブランド化を図ることで売ろうとしている（もちろんヨシだからこそできる商品ができれば理想ではあるが）。

このような環境にやさしい商品を守るに際して、消費者の理解を得る（理解を得ても実際に買ってもらおう）ことはむずかしい。消費者はどうしても安さを求めてしまう。同じ品質なら安いものを買おうとするのは自然なことだ。半ば強制的に国主導で推し進めなければ環境製品の購買の推進は難しいかもしれない。現在、国のエネルギー政策で、再生可能エネルギーの固定価格買取制度がある。再生可能エネルギーの値段を確実に割に合う値段に設定する制度である。これと同じような制度をエネルギー以外にも拡大させることも一つの方策であると思う。しかし、この制度が経済に与える影響（支出の増大）は決して良いものではないと思われるので、固定価格買取制度に頼らない体制のいち早い構築が求められる。

ヨシ原の中をカヌーに乗って、移動するのはとても楽しそうだった。そういうアクティビティーができる場所としてヨシ原を利用できないだろうか。ヨシ原で迷路を作っても面白いかもしれない。観光資源にもなるかも。刈り取ったあとのヨシは家畜の飼料として使えないだろうか。輸送のコストを考えると難しいのかもしれない。

（農学研究科修士課程 2 回生 丸山 晃央）

今回、生物多様性に配慮した企業の取り組みという事で、コクヨ工業滋賀様を見学させて頂き、取組みの変遷やノート作成までの流れについて、非常に興味深く聞かせていただきました。また、工場内を直接見学させていただき、予想以上に機械での自動作業によって従業員が削減できている事に驚きました。

コクヨは、ステーションナリー事業の他にファニチャー事業があるはずですので、コクヨ工業滋賀様と本社との位置づけ、また各事業の売上シェア等をより詳しく話していただけると、就活を間近に控える学生にとってより有意義になったのではないのでしょうか。

（農学研究科修士課程 1 回生 安藤 哲城）

I am grateful that I got the chance to visit the Kokuyo Company and to learn how the production chain of papermaking industry works. As one of the top producers around the world, Kokuyo is not only productive and efficient, but also focusing on ecological production. How to use the raw materials effectively and how to deal with the wastes environmentally would be a key factor to sustainable development, which is an imperative and eye-catching issue, worth fighting for.

（農学研究科修士課程 2 回生 Su Xinyi）

It was a great opportunity to visit the producer of the well-known “Campus” notebooks, and the newly-designed REEDEN series. I am impressed by their fully consideration on resource recycling - using the reed from Lake Biwa, paying attention to the waste ink and so on. For consumers, the feeling of being close to nature while writing on the notebook can be very treasurable. Meanwhile, on the way to the company, I had lunch with an intoxicating scenery: autumn sunshine spreading on vast stretches of sunflowers. I always enjoyed the study tours organised by CoHHO, a good combination of experience and knowledge acquisition.

(地球環境学舎修士課程2回生 董 楽)



特大の Campus ノートと記念撮影

2014年12月14日（日）に、京都大学・日本財団森里海シンポジウム「人と自然のつながり」を育てる地域の力ー淡海（おうみ）発・企業の挑戦ーを、キャンパスプラザ京都で開催しました。今回の森里海シンポジウムでは、琵琶湖を抱え環境先進県と言われる滋賀県を舞台に、環境マネジメントや地域振興に取り組む企業の取り組みを報告いただきました。

基調講演では、嘉田由紀子 前・滋賀県知事に、研究者や知事として、琵琶湖辺の環境や人々の暮らしと関わる中でどのようなことを考えてどのような取り組みをされてきたのかをお話いただきました。環境共生、生活環境主義、ふれあい価値など、自然と人の暮らしつながりを重視されてきたことがとても明確に感じられました。

つづいて、滋賀県の企業から、たねや農藝（讃岐和幸氏）、コクヨ工業滋賀（前田賢一氏）、滋賀銀行（辰巳勝則氏）の取り組みをそれぞれお話いただきました。讃岐氏からは、甲子園3つ分の新しい敷地を「人々の集まる森のお菓子屋さん」とするべく取り組んでおられる“森を作り里を作る”活動について、前田氏からは、びわ湖・淀川水系のヨシを原材料の一部として使用した【ReEDEN】シリーズの開発・製造・販売にまつわるお話や有志数人から始められたヨシ刈り活動の拡がりについて、辰巳氏からは、「環境格付」を通じた企業の環境配慮への取り組みの促進やさまざまなつながりを創出する「環境コミュニケーション」の取り組みについてご紹介いただきました。



基調講演（嘉田氏）



事例紹介（讃岐氏）



事例紹介（前田氏）



事例紹介（辰巳氏）

次に、森里海連環学からみる淡海の企業の挑戦と題して、「環境ガバナンス・地域振興」（吉積巳貴 特定准教授）、「企業活動と環境」（吉野彰 地球環境学堂准教授）、「森林・里山環境」（柴田昌三 地球環境学堂教授）の各視点から3企業の取り組みについて解説を行い、清水夏樹 特定准教授のコーディネートでパネルディスカッション「森里海連環を通じた”ものづくり” ”ひとづくり” ”地域づくり”」を行いました。パネルディスカッションでは、滋賀県では琵琶湖を抱えることに加えて宗教などの文化的背景もまた地域や人のつながりを支えていること、企業の環境配慮行動を継続させるために必要なこと、企業と地域とのネットワークの作り方などについて意見が交わされました。嘉田由紀は、研究者や学者は政治に背を向けないでほしいという願いと女性の社会進出と感性への期待が述べられました。

師走の忙しい時期ではありましたが、多くの方々がお越し下さり、参加者は150名を超えました。京都と滋賀だけでなく関東圏や沖縄からも参加いただき、今回のテーマに関する興味の拡がりを感じました。来場者アンケートの「参加しようと思われた理由はなんですか」という設問には、およそ半分の方から“森里海連環学に興味をひかれたから”という回答をいただきました。また、最後に書いていただいた感想欄では、これまでの人生体験を反映してか様々な視点からのコメントをいただきました。「森里海連環学」に対する市民の関心を感じるとともに、人と自然のつながりを生み出すさまざまな要素の絡み合いを再認識しました。森里海連環学が新しい形の融合研究となるように今後とも真摯に取り組んでいきたいと思っております。ご来場いただいた皆さま、本当にありがとうございました。

（安佛かおり）

本シンポジウムの模様は、

京都大学 OCW (OpenCourseWare) <http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja> で視聴いただけます。



パネルディスカッション

シンポジウム学生レポート 1 (地球環境学舎修士課程 2 回生 Gao Zheng)

On 14th December, I attended the symposium organized by the educational unit for studies on the connectivity of hills, humans and oceans (CoHHO Program), Kyoto University. In this symposium, four guest speakers were invited to share their experience about the application of environmental conservation in enterprises from different perspectives including governmental, agricultural companies, manufacturing companies and banks. Such a symposium is a very good and precious chance for people who are interested in such topics to communicate with enterprises directly, especially for us students, it makes us realize the gap between reality and theories, which will drive us to consider how to put what we have learnt in classrooms into practice.

Within the four topic speeches, I've got a deep and positive impression after listening to the speech given by Mr. Kenichi Maeda from KOKUYO PRODUCT SHIGA CO.LTD. This is a small-sized papermaking company based on the bank of Lake Biwa in Shiga Prefecture, with almost 40 years of history. Since 2007, this company began to develop, make and sell paper products made from reed living around Lake Biwa. With the enlargement of the market, they try to send messages about local ecological integrity and CSR to consumers through their beautiful and high-quality products. In addition, they also put a lot of effort to organize volunteer activities to mobilize more people to pay attention and make contribution to the protection of Lake Biwa.

There are two main reasons why I think their speech and achievement are attractive and impressive to me. Firstly, the region of Lake Biwa is very similar to my hometown, a small city in Jiangsu Province, where there is a big fresh water lake just like Lake Biwa. Reed is a very common plant in shoal waters in Northern Hemisphere. It is a very important part of the local ecosystem, mainly offering shelters to wild animals, meanwhile, it is also a part of the landscape. In the mind of people living near these waters, reed marsh is the link and intermediary zone between human society and wild natural world. However, with urbanization and modernization, reed marshes are dying-off. Mr. Maeda's speech reminded me of the reed marshes in my hometown. I think the pattern of KOKUYO's development could be a feasible example to similar companies in developing countries like China. Secondly, the strong sense of social responsibility and great motive power of Japanese enterprises touched me and earned my respect. One of the key factors for becoming a successful and respectable enterprise is that the company must give something good to the society while taking from it. This is the era of business. In other words, enterprises hold great power to influence the whole world. If enterprises are willing to put efforts on leading their consumers to the right direction, for instance, saving energy, saving food, living in harmony with the environment, etc., I believe that the speed by which we will be solving environmental problems can become much faster, for sure. It is comforting to see that there are still some companies like KOKUYO which never give up on contributing their power to improve the relationship between human and environment, in which case, their attitude is worth being taken as a reference by many transnational enterprises like P&G and Unilever.

In summary, I am very grateful to have attended this symposium before my graduation. I hope CoHHO Program can offer more chances to students to communicate with experts working on the leading edge of environmental conservation and sustainability.

シンポジウム学生レポート2（農学研究科修士課程1回生・田中美澄枝）

私はこのシンポジウムを通して、自分の将来についてより考えを深めることができました。

人と自然とがより良い関係を築くために、自分自身はどういう形で社会に貢献できるのか、シンポジウムに参加する前、始まりをむかえた就職活動にあたって、私はその答えを模索しているところでした。しかし疑問自体が漠然としていることもあって、具体的なイメージを思い浮かべられずにいました。また、環境保全と企業活動とは相容れないものという認識もあり、タイトルにある“企業の挑戦”という言葉には素直に惹かれ、何か面白い話が聞けそうだという期待を持ってシンポジウムに臨みました。

講演の中で紹介された3つの企業の取り組みの内容は実際、様々に興味深いものでしたが、私にとってとても印象的だったのは1つの共通点です。それは、いずれの事例も事業と関連した環境活動であるということです。単なるボランティアに留まらず、企業や事業にとっても意味のある活動を通して環境保全にも貢献しているという点です。一見環境保全と関わりのなさそうな企業の中で、こうした挑戦が行われていることを知って、純粋な驚きを感じると同時に期待感が湧き上がってきました。企業の中でも事業を通して環境保全に関わることができる、という新たな視野を得たことで、キャリア選択の幅もぐっと広がりました。

また、講演中のエピソードや、先生方の講評、パネルディスカッションを通して、企業や社会に対する研究者の果たす役割を改めて認識しました。こういった企業の取組に対して、専門家の立場から助言や評価を与えることもそうですが、大学などの教育現場や今回のような場を通してその企業の取組を広めることや、客観的な立場から特定の集団や地域の人だけで問題に取り組んでいては気づけない点を指摘することも重要な役割なのかもしれないと思いました。森里海連環学で言われる異分野間の連携と同様に、社会規模の問題に対処していくためにはその構成員である官学民それぞれの垣根を超えたつながりが広がっていく必要性を感じました。

そしてシンポジウム全体を通して、最も心に残ったのは嘉田前知事の「女性の力が、社会には必要です」というお言葉です。実際に女性として、母として、研究活動も仕事も家事育児も経験されてきた来歴を聞いたあとのその言葉は、どこか女性の強さを根底に秘めたような説得力がありました。語られた生き様や言葉の端々からもバイタリティが滲みだすようで、自分の母親より年輩の女性に対して純粋にかっこよさを感じたことが殊更に印象的でした。また、企業内保育園のような企業側からのサポートや、実際に企業・大学問わず社会の中で活躍される女性の姿を見聞きした中で、今後社会に出てゆく女性として明るいビジョンを持つことができました。

活動紹介： 研究員によるこどものための「森と私と海」の講義

森里海連環学教育ユニットが所属する京都大学学際融合教育研究推進センターから依頼を受け、安佛かおり研究員と長谷川路子研究員が、2014年10月25日（土）に朝日カルチャーセンターくずは教室で開かれた「京都大学と連携！こどものための理系文系横断リレー講座」の講師を務めました。「森と私と海～環境問題について考えよう～（環境学）」と題し、小学校高学年から中学校1年生までの子ども6人に森里海連環学を紹介しました。

前半の1時間は安佛研究員が担当しました。京都大学の芦生研究林から舞鶴水産実験所にかけて由良川流域で実施している全学共通科目「森里海連環学実習Ⅰ」の様子を紹介しながら、森から海までの生態系のつながりを解説しました。また、いろいろな魚の口の骨格標本を見せ、食べ物によって魚の口の構造が全く違うことを紹介しました。子どもたちは骨格標本に並々ならぬ興味を示し、休憩時間もそっこのけで見入っていました。

後半の1時間は長谷川研究員が担当し、環境問題が発生する理由を社会や経済の仕組みに注目して解説しました。さらに、私たちが日々の買い物を通じて実践できる環境保全の例としてコクヨ工業滋賀が作っている琵琶湖のヨシを使ったノートを紹介し、ノートの主要な消費者である子どもの目線でヨシノートの効果的なマーケティングを考えました。なお、子どもたちが考えてくれたマーケティングのアイデアは、後日スタディツアーでコクヨ工業滋賀の工場を訪れた際に担当者の方にお伝えしました。

少人数だったので和気あいあいと進めることができました。ただ、子どもたちの囚われのない自由な発想やそこから飛び出る質問には驚かされ、たじたじでした。

（長谷川路子）



講義紹介： 森里海国際貢献学

森里海連環学教育ユニットの必修科目の一つである『森里海国際貢献学』は、グループに分かれて発表と討論（セミナー）を行います。前号に引き続き、他の2つのグループの様子を紹介します。

【グループ2：担当 清水】

グループ2のセミナーには、地球環境学舎と農学研究科の修士課程の学生14名が参加しました。各学生は、講義や調査、所属する研究室のゼミなどの時間をやりくりして前期は5月下旬から7月にかけて週1回のペースで、後期は1月下旬の3日間に集中してセミナーを開催しました。

前期は、修士 2 回生の昨年度に実施したインターンシップの報告から始まりました。これからインターンシップに行く修士 1 回生にとって参考になる報告となりました。また修士 1 回生は、卒業研究の成果紹介や現在進めている修士論文研究の背景、課題、研究方法の紹介、これから行うインターンシップの計画を報告しました。異なった分野や出身国の学生が参加しており、専門用語や言葉の概念を相互理解するための質疑応答にも多くの時間がさかれました。

後期は、このセミナーの参加者の多様性を活かしたセミナーを企画しました。前期で認識された互いの研究分野の違いを踏まえ、「聞き手に理解してもらえるプレゼンテーションの工夫」「持ち時間 30 分の中でプレゼンテーションを行うとともに、聞き手の理解をより深めるディスカッションを、発表者自らがオーガナイズする（時間配分は自由）」「ディスカッションでは最低 5 名が発言する」という課題を全員に課しました。インターンシップを実施した学生からは、臨場感あふれる報告がなされ、また、現在取り組んでいる修士論文研究の進捗の報告もありました。修士 2 回生は、修士論文提出の忙しい時期でしたが、他の専門分野の学生にも理解しやすいように一部を抽出して説明するなど、本セミナーの課題に就いていました。プレゼンテーションに写真や動画を用いたり、論点を整理して賛成/反対をたずねたり、前期よりもやや緊張感が高まり、しかしテンポの良いディスカッションとなりました。プレゼンテーションには多くの工夫が見られ、聞き手が発言しやすいディスカッション構成を考えるなど、発表者と聞き手の双方向性をもった活発なコミュニケーションが実現できたセミナーとなりました。

(清水夏樹)



【グループ3：担当 ラベルニュ・安佛】

A total of ten students from different countries enrolled at the Graduate School of Agriculture, the Graduate School of Global Environmental Studies and the Graduate School of Economics actively participated to this course. The first semester sessions were dedicated to 1) learn basic principles and methods of scientific presentation and 2) apply this new knowledge by presenting in English their respective internship plan. Students who did not intend to do an internship had the choice to present either their own master / doctoral research or a scientific article. The second semester sessions aimed at improving previously learned skills and was dedicated to the presentations and discussions of internship or personal research achievements.

For example Mr. Baltazar Dolton Erick Suyosa presented his study on the comparison of household sewage management practices between two cities in the Philippines, and proposed interesting solutions to improve people practices and local management (Laguna and Lake Development Authority, Philippines). Ms. Fu Jing presented her research on compensatory mitigation of coastal wetlands in the Yellow River Delta, China (Beijing National University, China). Ms. Miho Kanno presented her research on the desertification issue leading to a decrease of suitable areas for agriculture in Namibia. She focused on villagers uses of natural resources and on the invasive species *Cynodon dactylon* and its

impact on pearl millet yield (Ministry of Agriculture, Water and Forestry, Namibia). Mr. Yasumasa Murata presented his doctoral research on the use of ultra-violet as a substitute for traditional chemical pesticides for spider mites in order to contribute to solve the issues of pesticide resistance and pollution. Finally, Ms. Zhang Mengyuan the only economist of the group introduced us to the basics of emission trading (e.g.: greenhouse gases, pollution, etc...) in the context of climate change.

Being abroad during half of the course period, the students and I decided that we could organize some of the presentations using the university video-conference material. Although students are now used to attend video-conference lectures, this time they were the one that had to give a presentation using this material. First time users were somewhat clumsy, but the overall impression of their presentations was very professional and I could feel that they had lots of fun doing it.

The first two classes were very theoretical and students found it difficult and abstract. However, once they have managed to make the link between presentation theories, their own research and the message they wanted to transmit to their fellow students, they started to relax and the course became interactive and challenging. Over time, some students managed to overcome their shyness and started to ask pertinent questions during discussion sessions, leading the way to the other students. This course was also an opportunity for students of various specific fields to be immersed in a pluridisciplinary and international team, which is nowadays a standard in many world leading research institutes or private companies. I have enjoyed very much this course and the energy of those dynamic students.

(Edouard Lavergne)



ステファンくん、平成 26 年度 京都府名誉友好大使に任命される

森里海連環学教育プログラムの同窓会・会長で修了生のステファン・オリヴィエ・ランドリアマナンツァさんが、平成 26 年度「京都府名誉友好大使」に任命されました。この活動は、京都で学ぶ留学生に世界の各地域と京都府とのかけ橋として、国際的な文化交流や地域活性化、京都留学の魅力発信の活動をしてもらうものです。

心配りを欠かさない優しい人柄で「ステファンくん」と皆に親しまれるランドリアマナンツァさんは、マダガスカル出身で、母国語はもちろん、英語・フランス語、そして日本語も流ちょうに話します。修士課程を修了したこの春からは日本国内の企業で働くというステファンくん、これからもますます活躍してくださることを願っています。

2015年3月2日に、森里海連環学教育ユニット（山下 洋ユニット長）と株式会社たねや（山本昌仁社長）は、地域の社会・環境貢献のために、「京都大学森里海連環学教育ユニットと株式会社たねやとの連携に関する覚書」を締結しました。



覚書を手に握手する山下ユニット長(左)と山本社長(右)

(株)たねや(たねやグループ)は、滋賀県近江八幡市を拠点とし、お菓子の製造販売を主な事業としています。自然に学ぶ町づくりをビジョンに掲げ、環境づくりにも取り組まれています。近江八幡市周辺の環境やたねやグループの取り組みは、森里海連環学の実践の場一森(八幡山・安土山)、里(水郷, 近江八幡旧市街、伝統行事やものづくり・まちづくりへの人々の参加)、海(西の湖・琵琶湖)として研究者の関心を集めており、森里海連環学教育プログラムでは、当地で現地実習を実施するなど、環境整備や学術的知見の提供を行ってきました。



調印式後に山本社長がCoHHOユニット本部を訪問

今回の覚書により、当ユニットと(株)たねやは、(1) 周辺地域の森里海(湖)を対象とした森里海連環学に関する共同研究、(2) 森里海連環学教育プログラムの現地実習、(3) (株)たねやの環境づくり・ものづくりの現場でのインターンシップ研修、(4) 講演会・シンポジウム、ワークショップなどの実施について、相互に連携協力し、森里海連環学の理念に基づいた地域社会への貢献を目指します。

(安佛かおり)

これまで、地球環境学堂・学舎との共同プロジェクトや2013年11月に開催された森里海連環学国際シンポジウムなどを通して、ベトナムの研究者・研究機関との交流が深められてきました。今回、ベトナム中部を対象とした「森里海連環学」に基づく共同研究について、フエ農林大学（Hue University of Agriculture and Forestry: HUAF）および大学内の農林研究開発センター（Centre for Agriculture Forestry Research and Development: CARD）などから多くの研究者に参加いただき、情報交換や研究サイトの検討を行いました。京都大学からは、教育ユニットの吉積と清水が参加し、フエ農林大学の Le Van An 学長をはじめ多くの研究者の方々に温かい歓迎を受けました。

ミーティングは、2015年3月19日に、フエ農林大学にて開催されました。出席者の自己紹介の後、京都大学より森里海連環学教育ユニット・プログラムの紹介、また、フエ農林大学より大学の組織や取り組み、ベトナムにおける森里海連環の状況などについて解説いただきました。



さまざまな研究分野の専門家が集まり、今後の共同研究に向けて意見を交わしました



植林された sand dune



少数民族のための伝統的コミュニティハウス
(2007年建設、京都大学も参加)

さらに、フエ大学の Institute of Resources and Environment の Ho Dac Thai Hoang 博士からは、沿岸部の砂丘（Sand dune）での生態系を活用した防災・減災（Ecosystem for Disaster Risk Reduction:Eco-DRR）についての研究成果をご紹介いただきました。

昼食後は、フエ市内から沿岸部に向けて車で移動し、農村・漁村の生活やラグーン、砂丘を実際に見て回りました。翌日は、山間部のアールオイ県にある Hong Ha を中心に、焼畑農業での暮らしとアカシアの植林・採卵鶏の飼育・コーヒーやバナナ栽培などによる農家の現金収入の模索の事例を現地で紹介いただきました。フエ市内でも、また農山漁村地域ではさらに強く、森里海の連環の存在と意義を感じました。今後も、共同調査や両国間の比較研究などを発展させ、国際セミナーとして公開の報告会も開催していきたいと考えています。

(清水夏樹)

2015年3月22日(日)に、森里海連環学教育プログラム同窓会の活動として、森里海連環学スタディツアー 2015 春 in 近江八幡を実施しました。

春らしい麗らかな天候のもと、朝8時に京都大学を貸し切りバスで出発し、ラ・コリーナ近江八幡へ向かいました。ラ・コリーナ近江八幡は、森里海連環学教育ユニットが2015年3月2日(月)に「連携に関する覚書」を結んだ株式会社たねやの商業施設です。周囲には八幡山や西の湖があり、森里海連環学のフィールドとして適していることから、実習科目やスタディツアーの折に訪問させてもらっています。到着後、まずは今年1月にオープンした店舗を見学させてもらいました。芝に覆われた屋根やヨシが混ざり込まれた土壁など自然とのつながりを意識した独特の造りに、参加者一同、興味津々でした。さらに、本社施設やレストランの建設工事が続く敷地内を案内してもらい、敷地内の植林作業と敷地裏の竹林整備作業に移りました。暖かな陽気のなかで2時間ほど汗を流しました。

お昼ごはんを食べて気力・体力ともに回復したところで、午後は、①山コース(八幡山ロープウェイ)、②湖コース(水郷めぐり)、③瓦コース(かわらミュージアム)に分かれて近江八幡の街を散策し、いろいろな角度から森・里・海(湖)のつながりを体感しました。

朝から夕方まで動き回ったにもかかわらず、帰りのバスの中で学生たちの会話が途切れることはありませんでした。帰学後には大学の近くで同窓会主催の懇親会も開かれ、出身・所属・立場などを超えて丸1日 CoHHO の仲間と楽しい時を過ごしました。(長谷川路子)



独特のデザインのラ・コリーナ近江八幡
メインショップ



どんぐりの植樹をしました



薄暗くなってしまった竹林から枯れた竹を運び出したり、不要な竹を伐り出しました



山コース

八幡山の山頂付近まではロープウェイで約4分。登るにつれて近江八幡の市街地（思ったより大きい！）、山並み、小さな湖などが見えてきます。そこからは徒歩組と合流し、山頂付近を軽く散策。かつての城跡が展望広場のようになっていて、街から琵琶湖までが一望できます。春の霞の中できらきらと光る琵琶湖と周囲の山並みはとても美しく印象的でした。その他にも八幡山にはお寺や神社があり、たくさんの人で賑わっていました。近江八幡の歴史と森里海のつながりを同時に感じられる面白い場所だと思います。

（地球環境学舎修士課程2回生 田中 里奈）



湖コース

Taking part in the study tour organized by the CoHHO and the Alumni association at Omihachiman has been an occasion to foster again my knowledge on the relationship between human, forest and the lake in this area. It was also an opportunity to enjoy the wonderful rural scenery and the company of other students, professors and staff of CoHHO. Apart from the wonderful experience on bamboo forest management and tree plantation on that day, I could admire the beauty of the countryside and increase at the same time my understanding of the area when joining the Suigo cruise. It was a wonderful experience to explore the lake and the surrounding environment by boat. This boat tour was very informative and resourceful since the captain of the boat, who is at the same time our guide shared detailed information of the area and its story. In the past, farmers dragged the soil under the lake and used them to make Kawara or use this fertilizer on the paddy field. When it rains, parts of the soil are brought by runoffs and came back again in the river.

In short, it was a very interesting and educating tour, I have enjoyed a lot the different activities we had on that day.

（地球環境学舎修士課程2回生 Stephane Olivier Randriamanantsoa）

瓦コース

There are many Kawara tiles in Kawara museum. I was surprised Japanese typical silver Kawara needs a sophisticated technology to bake mud. When we make Japanese Kawara, we need to bake it at high temperature with carbon gas. Then a carbon film is formed on the surface of Kawara. This filming make Kawara tougher. I experienced making Kawara from mud. When I was mixing the mud, thinking what do I want to make of it, my childhood memories came back to my head and I felt happy using my hands and brain. I am looking forward to receiving the original baked Kawara stuff in the near future.

(農学研究科修士課程 2 回生 井上 博)



国際学会発表補助金を受けた履修生の学会発表

2014年度の第2回国際学会発表補助金では、5名の履修生が申請・採択され、国際学会にて発表を行いました。

発表者	発表学会名 (場所)	発表タイトル(発表形態)
井上 博	Ecopath 30 years (スペイン・バルセロナ)	Temporal and spatial variability in overfished coastal ecosystems: a case study from Tango bay, Japan (ポスター発表)
SAMUEL TEFERA ALEMU	The IARU Sustainability Science Congress <i>Global Challenges: Achieving Sustainability</i> (デンマーク・コペンハーゲン)	Fencing the commons in the lower Omo valley, Southwestern Ethiopia: Saving feed for cattle, income for people and conflict for both (ポスター発表)
仲畑 了	第6回国際樹木根会議 (日本・名古屋)	Spatial distribution and annual changes of fine root demography in a larch plantation (ポスター発表)
ZHANG QIYUE	East Asian Association of Environmental and Resource Economics Inter-congress Conference (インドネシア・ジャカルタ)	Using LMDI method to analyze China's industrial carbon emission from final fuel use over 2005-2011 –Discussing China's first efforts on industrial carbon emission mitigation (口頭発表)
HOANG HAI THI NGUYEN	6th International conference on Environmental Science and Development (オランダ・アムステルダム)	Costs comparison between FSC and non FSC Acacia plantations in Quang Tri province, Vietnam (口頭発表)

Event Report 7 第2回修了式

2015年3月23日、森里海連環学教育プログラムの第2回修了式を執り行いました。

森里海連環学教育ユニットは、旧演習林事務室において森里海連環学教育プログラム第2回修了式を執り行いました。今年度は23名の学生が修了を迎え、開講初年度だった昨年度と合わせて修了生は49名となりました。

修了式では、関係者から修了生に贈る言葉や、修了に際する万感の思いを表した修了生の言葉の中でよく言及されたのが、「違う学問分野・国の人たちと関わることの大切さ」、および、「プログラムを通して手に入れた仲間の大切さ」でした。



日本財団 荻上チームリーダーよりご祝辞



一人一人に修了証が手渡されました

森里海連環学教育プログラムには、農学研究科、人間・環境学研究科、地球環境学舎を始め、京都大学内のさまざまな大学院から学生が集まってきます。また、授業は基本的に英語で行われるので留学生も多く参加しています。異なる学問分野を専門とし、興味・関心の対象も多様な学生が共に学び、時には、言葉や文化の壁を越えて互いの意見を交わし、ひとつの解を見つけることが求められることもあります。森里海連環学は、森、里、海という異なる生態系間のつながり、ひいては人間と自然のつながりを解明し守ることを目指していますが、その根底にあるより普遍的な精神“自分と異なる存在を理解し、共に生きる”ことをも学生はプログラムを通して学んでいるようです。

そして、こうした学生たちの関わり合いはプログラムがなければ生まれなかったでしょう。彼らが共に学ぶ仲間と築いた関係は、習得した知識と同じくらい価値があるものではないでしょうか。このきずなが森里海連環学教育プログラム同窓会の活動を通して今後も維持・発展されていくことが期待されます。

修了生の皆さまのご活躍を心より祈念いたします。



記念撮影

発行

京都大学 学際融合教育研究推進センター
森里海連環学教育ユニット



〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学フィールド科学教育研究センター内
<http://fserc.kyoto-u.ac.jp/cohho/>

